

FTE 新入社員課題報告書

本社屋上室外機における 散水システム導入および比較検討

○高橋 京佑, 小坂 丞, 仲野 茂翠, 設樂 日和, 吉岡 拓海, 渡辺 夏芽,
中村 天音, 塚田 浩貴, 青木 昇, 吉川 唯希, 佐藤 央都, 阪田 悠

Introduction and Comparison of Watering System for Condensing Unit on the office rooftop

○ KEISUKE Takahashi, TASUKU Kosaka, MOTOAKI Nakano, HINOWA Shidara, TAKUMI Yoshioka, NATSUME Watanabe,
AMANE Nakamura, HIROTAKA Tsukada, NOBORU Aoki, ITSUKI Yoshikawa, HIROTO Sato, YU Sakata

Abstract :

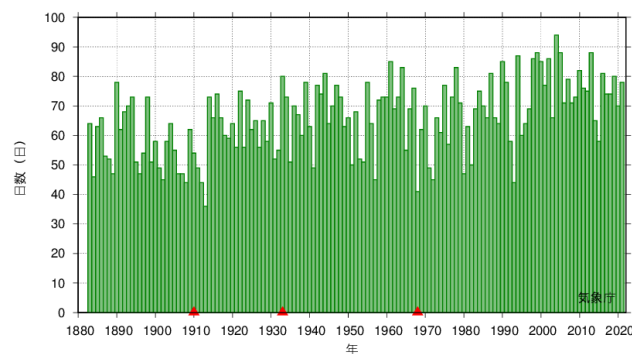
1. 序論

1.1 背景

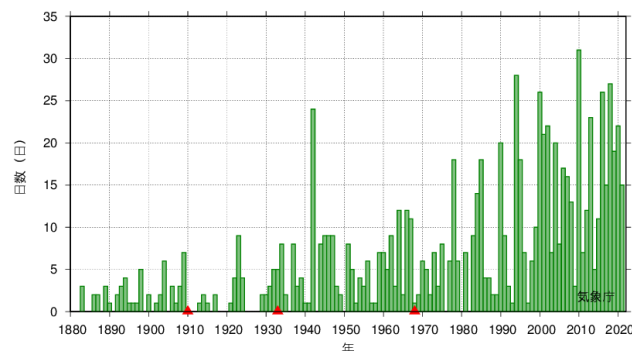
近年, 地球温暖化の影響のため, 日本全国の気温は上昇傾向にあり, 2021 年の大阪府の年間平均気温は 1883 年に比べ 2.5°C 上昇している [1]. さらに, 2021 年の真夏日と猛暑日の合計日数は, 2014 年の 65 日に比べ 13 日増加, 猛暑日に関しては 8 日増加しており [2], 1880 年からの真夏日および猛暑日の長期的推移を見ると増加傾向である (Fig. 1).

空調および冷凍分野において空気を冷やす原理として, ”冷凍サイクル” が挙げられる. Fig. 2 に示す通り, 冷凍サイクルは「圧縮」「凝縮」「膨張」「蒸発」の 4 行程で構成されている. 冷凍サイクルにおいてモリエル線図 (Fig. 3) は使用する冷媒の状態変化に伴う運転状況の変化, 装置能力, 装置動力などの計算によく使用される. 前述した気温上昇に伴い, 今後は空調機の利用機会が増えると予想できる. 一般に空調機には室内機と室外機に分類されており, 冷房時において, 室外機は圧縮と凝縮, 室内機は蒸発と膨張の行程をそれぞれ担っている. 室外機は高圧化した冷媒ガスを外気と熱交換させることで凝縮させ, 室内機では, 膨張した冷媒液を室内の空気と熱交換させて冷媒の潜熱を利用して冷却する.

ここで, 室外機吸い込み側空気, つまり外気温度が上昇すると, それに付随して凝縮温度が高くなる. それにより冷却能力は小さくなり, 圧縮機駆動の駆動力が大きくなるため, 成績係数が小さくなる. したがって, 同じ冷凍能力を出すためには消費電力が大きくなる. 実際に外気温 30°C , 相対湿度 50% の環境下で簡易的な散水をしながら電力量を計



(a) 大阪 真夏日



(b) 大阪 猛暑日

Fig. 1: 真夏日および猛暑日の年間日数 1883-2021 年 [3]

測した. その対照実験の計測環境は Table. 1 のとおりである. Fig. 4 に示すように, 実験 2 (散水あり) の電力量は実験 1 (散水なし) のそれと比較して小さくなっていることが分かる.

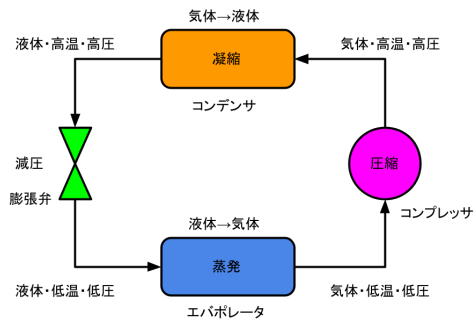


Fig. 2: 冷凍サイクル

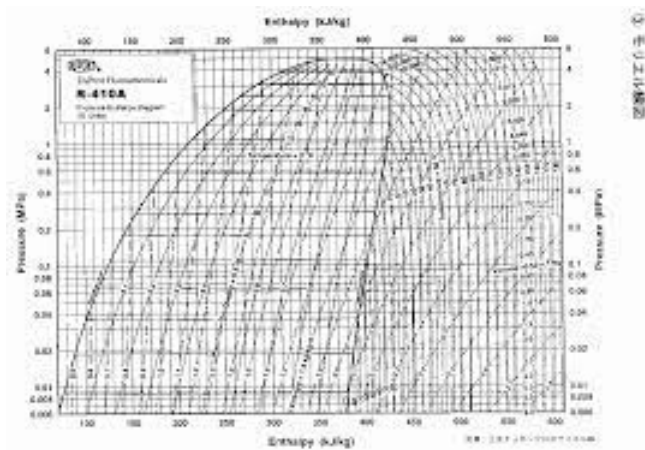


Fig. 3: モリエール線図 (p-h 線図) 冷媒:R410

Table 1: 計測環境

	外気温 [°C]	湿度 [%]	設定温度 [°C]	気候
実験 1	34.3	48.0	27.0	晴れ
実験 2	32.9	58.9	27.0	曇り

1.2 目的

1.1 節 より, 室外機において散水システムの導入が効果的であるということが分かった. そこで本研究では, 散水システムの導入に伴い自作散水システムや市販の機器など様々な条件で比較検証を行い, 電気代および水道代とのコストバランスを考慮しながら, 最適な散水システムを検討することを目的とする.

2. 調査内容

本章では本研究で行った計測のための調査内容について説明する.

本研究で調査対象とした室外機はビル用マルチエアコンである三菱社 PUHY-EP335DMG9 を採用した (Fig. 5, Table. 2). この室外機に散水の有無など, 以下の 4 条件に分けて計測を行っていく.

- 実験 1 散水なし
- 実験 2 散水あり (手動)
- 実験 3 散水あり (自作)
- 実験 4 散水なし (雨天)

Table 2: 室外機仕様 (冷房時)

PUHY-EP335DMG9

電源	3 相 200V
能力	33.5 kW
消費電力	10.7 kW
冷媒	R410

また, 計測時間は日中で最も気温が高くなる 13 時から 15 時までの 2 時間とし, データログを取れるもの以外のパラメータは 10 分ごとに計測するとした.

2.1 自作散水システム

本節では, 計測実験の比較対象として自作する散水システムの概要について説明する.

Fig. 6 に示す通り, 屋上にある蛇口からホースと塩化ビニル管を結合させて室外機まで通し, 散水ノズルを用いて設置した.

2.2 計測

実験で計測するパラメータは以下の通りである.

- ・ 外気環境 (気温, 相対湿度, 風速)
- ・ 凝縮器入口温度 (2 箇所)
- ・ 凝縮器出口温度 (2 箇所)
- ・ 室外機 (圧縮機運転状況)
- ・ 電気系 (電流, 電圧, 電力量)
- ・ 散水系 (水温, 散水流量)
- ・ 室内系 (設定温度, 温湿度)

3. 結果

各条件での計測結果は Table. 3 に示す通りである. 各計測実験での電力量との推移は Fig. 4 に示す.

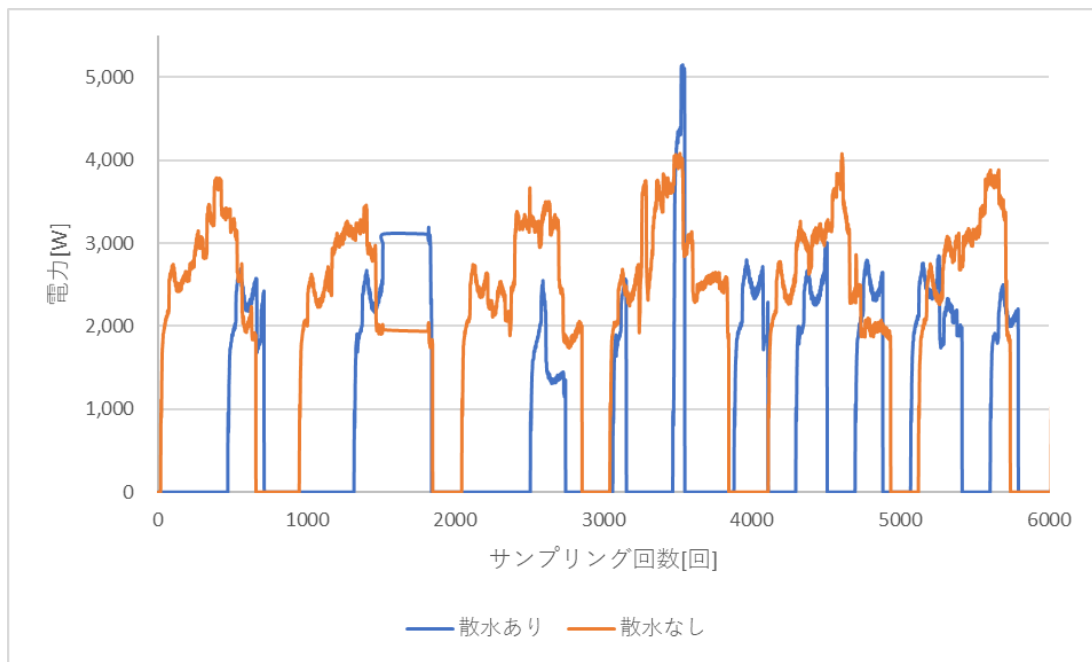


Fig. 4: 散水の有無による電力量の比較



Fig. 5: 室外機 PUHY-EP355DMG9

Table 3: 各実験の計測環境

実験	計測日	平均気温 [°C]	平均湿度 [%]	h [kJ/kg]	気候
1	7/13	34.3	48.0	76.5	晴れ
2	7/15	32.9	58.9	80.9	曇り
3	7/31				晴れ
4	7/19	27.9	82.8	78.4	雨
5	7/21	32.1	58.4	77.5	曇り/雨

4. 考察

従量電気料金を 25 円として見積もった際の各実験における 2 時間がかかった電力量および電気代は Table. 4 に示す。

Table 4: 2 時間あたりの電力量および電気料金

	消費電力 [kWh]	電気代 [円]	減少率 [%]
実験 1	4.24	118	—
実験 2	1.66	42	60.8
実験 3			
実験 4	2.88	72	32.1
実験 5			

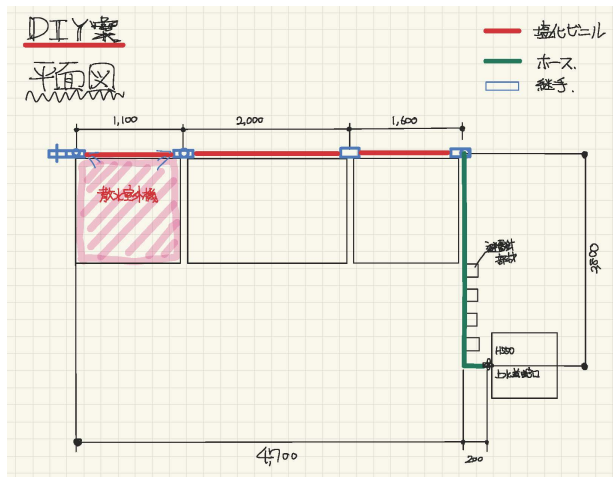
(挿入したグラフ) に示す通り, 散水した場合は最大消費電力および運転時間が小さくなっている事が分かる. 実験 1 に比した消費電力の減少率は, 実験 2 で約 60%, 実験 4 で約 32% 減少することが分かった. これは外気環境が異なるため, 正当性の評価としては難しい面があるが,

5. 結論

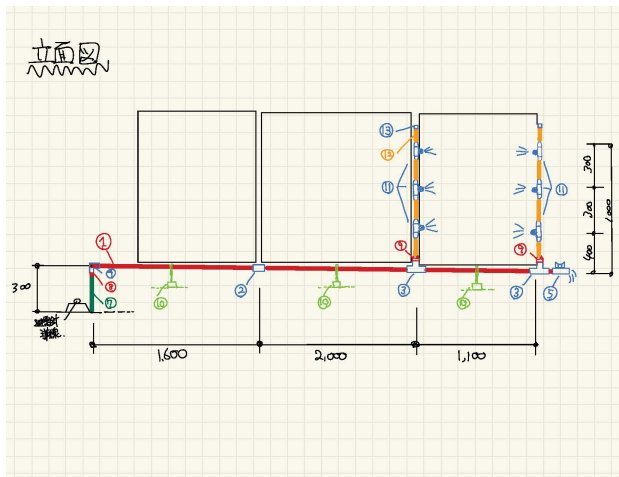
本章では計測結果および考察を総括した結論を示す。

参考文献

- [1] 国土交通省, 気象庁, 大阪府 日最高気温の月平均値, https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/monthly_s3.php?prec_no=62&block_no=47772&year=&month=&day=&view=a2
- [2] George's Web Sites, 大阪府-大阪市の気温に関する統計情報, http://www.tvg.ne.jp/george/weather/gw_stat_temp.html?city=oosaka



(a) 平面図



(b) 裏手立面図

Fig. 6: 散水システム設計図

- [3] A-PLAT 気候変動適応プラットフォーム, 気候変動の観測・予測データ, 大阪府観測データ, https://adaptation-platform.nies.go.jp/map/Osaka/index_past.html